

令和 7 年度 学校研究について

1 研究主題

自ら学び出す子の育成 ～自己調整力を育む授業づくりを通して～

2 主題設定の理由

昨年度の実践の成果として、「南郷丘の子の授業」は、個別最適で協働的な学びを実現するために、委ねる授業に絞った合言葉を作成し、めざす授業の姿を具体で示し、教師間および教師と児童間で共通理解を図ったことで、学校全体で授業スタイルを確立することができた。特に、学習課題をどうやって解決するのかを自己選択・自己決定する「えらぶんタイム」では、児童が自ら学びに向かう姿が見られるようになった。教師は、児童につけたい力をつけるために「えらぶんタイム」をどう活用していこうかと考えるようになり、実践の検証から見える課題について、授業改善に取り組むことができた。

一方、課題も挙げられる。2軸のねらいである「教科のねらい」と「自立した学びてになるためのねらい」を達成させるために、つけたい力がついた児童の姿の具体化と、児童に学びを委ねる場面の吟味が必要である。また、委ねる授業を続ける中で、そもそも「自立した学びて」の具体的な姿の捉えが曖昧で共通理解できなかった。今年度は、昨年度児童と共有できた委ねることの目的に加えて、「自立した学びて」の具体も共有していきたい。そのために、児童が学びを自分事として捉え、自ら学びに向かう「BE THE PLAYER」を合言葉にしたい。これらの課題を改善・克服するために、今年度は上記のような研究主題を設定し、以下の3つの内容で研究を推進する。

(1) 2軸のねらいを達成するための単元構想

昨年度の実践より、児童につけたい力をつけるためには、児童に委ねることが有効な場合と、軌道修正や揺さぶりなど教師が教えることが有効な場合と、双方が必要であることが分かってきた。教師は、「教科のねらいの達成」と「自立した学びての育成」のために、以下のように単元構想を行い、ねらいに迫ることができるようしていきたい。

- ① 教科としての資質・能力を確認、把握する。
- ② 日々の授業の中で児童の見取りを行い、実態をつかむ。
- ③ 具体的な児童の姿で単元のゴールを決める。
- ④ 児童につけたい力がついたのかをどこで見取るのか、単元のどこで委ねると有効なのかを見極めながら、単元構想を行う。

今年度は、研究授業の在り方を見直し、校内研修会で単元を作ることから始めたり、教材研究をする共通した時間を設け複数で話し合ったりして練り上げたりすることで、単元を通して児童につけたい力を明確にしていきたい。

(2) 子どもが主役の「南郷丘の子の授業」

「自律した学びての育成」に向けて、今年度も「南郷丘の子の授業」をレベルアップして実践していく。児童がより自走できるよう、年度初めに「えらぶん集会（学び集会）」を開き、学ぶのは自分であること、学びを進めるのは自分であること、「学びは BE THE PLAYER」を共有したい。さらに、日々授業を見合ったり、異学年で授業をしたりすることで、少人数でも学びが深まるよう工夫していきたい。教師はより児童を信じて委ね、「自律した学びて」の具体的な姿を掲げること、児童が自ら学び出すよう育てていきたい。

また、過不足なく表現する力を育成するために、日々の授業の中で、児童が自分に足りなかったものを練り上げる場、児童同士で練り上げていく場を設定する。

(3) 自己調整力の育成

「自己調整力の育成」に向けて、今年度も授業終末や単元末の振り返りを大切にし、自分の変容や成長を自覚化できるよう、授業の終わり5分は必ず振り返りを行う時間としたい。この振り返りが、次時以降どのように学ぶかを考えて取り組む「えらぶんタイム」につながるように、教師は児童の振り返りを丁寧に価値づけ、フィードバックしていきたい。また、より必要感のある課題、ゴールに向かう明確な見通しを持たせ、児童がより最適な方法を自己決定できるよう育てるとともに、身に付けた自己調整力を学校生活のあらゆる場面で生かすことができるようにしていく。

以上3つの内容から、研究を推進していくために教師は、「教科のねらい」と「自律した学びてになるためのねらい」を明確にした授業づくりを行っていくことが必要である。授業の中で、教師は常に出場を見極め、一人一人に力がついているのか丁寧に見取ることが不可欠である。

3 めざす児童像

- ・主体的・対話的に課題を解決しようとする子
- ・自分の考えを過不足なく表現できる子
- ・自己の学びや成長を次に生かす子

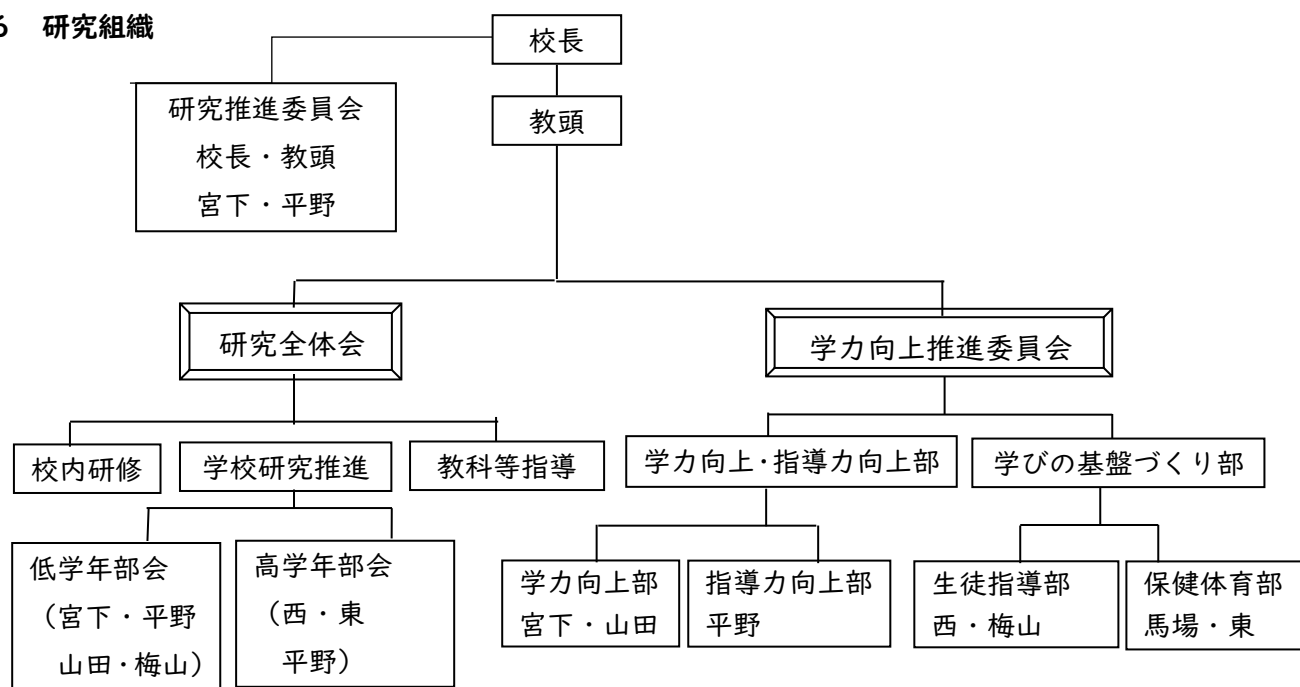
4 研究の重点（取り組みと検証）

研究の重点	取り組み	検証	
		教師	児童
(1) 2軸のねらいを達成するための単元構想	・資質能力の育成 ・表現モデルの言語化 ・スキルタイム（学力向上）	実施検証 アンケート検証	評価テスト（学力調査等） 検証問題
(2) 子どもが主役の「南郷丘の子の授業」	・自律した学びての育成 ・教師の見取りと出場	実施検証 アンケート検証	アンケート検証
(3) 自己調整力の育成	・振り返りの時間の確保 ・自律した学びての育成	実施検証 実施検証	ノート・PC アンケート検証

5 研究の方法

- (1) 研究授業
 - ・全学級実施
 - ・「南郷丘の子の授業」を軸にした授業展開
 - ・教材研究を兼ねた校内研究会
 - ・研究の重点取り組みに即した授業整理会
 - ・授業改善チャレンジ
 - (2) 理論研究
 - ・研究推進委員会→校内研究会
 - ・学力向上推進委員会
 - ・講師招聘（プロジェクトマネージャー等）
 - ・文献研究
 - ・他校の授業実践の研究
- } による研究の推進

6 研究組織



7 研修計画

月	研 修 内 容	教材研究の日(月一回)
4 月	研究主題の設定 研究計画 学校研究の方向性(研究構想図・めざす授業像)の共通理解 学びの基盤づくりの共通理解 「えらぶん集会(学び集会)」	
5 月	児童の実態把握と取組についての共通理解 研究授業の視点や指導案の形式についての共通理解 2 年研究授業(提案授業) 「南郷丘の子の授業」の取り組み検証	
6 月	計画訪問に向けた研修会 年研究授業(計画訪問 研究授業) 授業を見合う会⇒授業改善チャレンジ	
7 月	1 学期の成果と課題	
8 月	「南郷丘の子の授業の取り組み検証」⇔2 学期以降の取組についての共通理解	
9 月	2 学期の取り組みの重点を共有 「えらぶん集会」	
10 月	年研究授業 年研究授業 授業を見合う会⇒授業改善チャレンジ 「南郷丘の子の授業の取り組み検証」	
11 月	年研究授業	
12 月	研究のまとめについての共通理解 今年度研究実践の検証 2 学期の成果と課題 「南郷丘の子の授業」の取り組み検証⇔3 学期以降の取組についての共通理解	
1 月	研究のまとめ⇔来年度の研究の方向性について	
2 月	来年度の方向性の検討 児童の実態把握と来年度つきたい力の共通理解	
3 月	来年度への方向付け	

